

◆シンポジウムの前に

【司会 吉岡昌子（立命館大学人間科学研究所「大学バリア・フリー」研究チーム代表）】

こんにちは、立命館大学の吉岡と申します。今日はこのようにたくさんの方にお越しいただき、ありがとうございます。私からは望月先生のお話を受けて、シンポジウムの前振りとして、少しお話ししたいと思います。

このシンポジウムでは、タイトルを「障害学生支援の新しいビジョン」としております。では、その新しいビジョンとは何か、これを分かりやすく言いますと、以下のスライドのようになります。

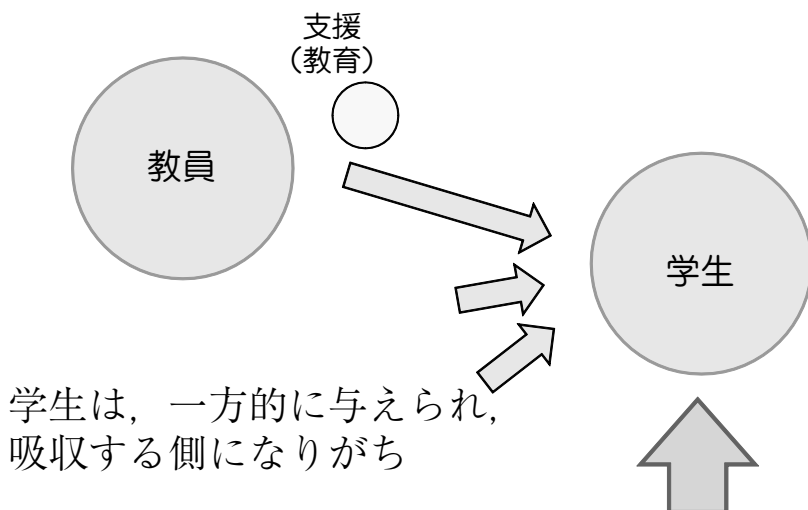
特にこの「楽しもう」というところを1つ重視しています。毎日の支援活動をやっていくと、すぐに目的を果たせなかったり、壁にぶち当たってしまうこともたくさんあります。けれども、そこで止まってしまうのではなく、目の前の現実を受け止めて、でも、その現状の中から何か新しい発想をできないか、何か変えていけないかと試行錯誤を続けていく、このようなスタンスを持ち続けるためには、「楽しむ」ということが非常に重要になってくると

新しいビジョン！

- 学生も職員も教員も、立場や職性をこえて支援を創るプロセスをともに楽しもう

そして

- 障害学生支援を良くすると同時に、その作業を通じて、既成の大学教育をもっと豊かにしていこう

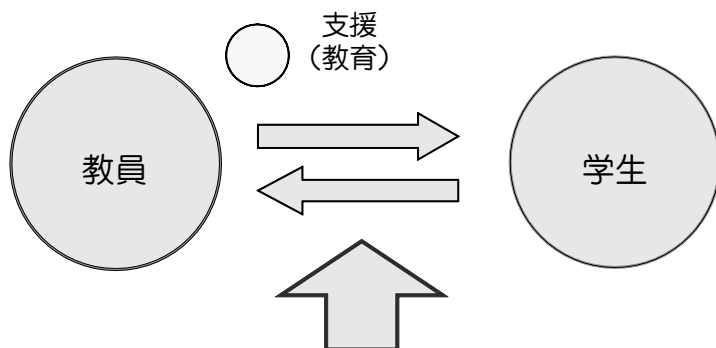


従来の大学教育の枠組み

考えています。

そして、もう1つ、「立場や職制を超えて」の「超えて」ということについて。先ほどの望月先生のお話にもございましたが、これまでの一般的な大学教育というのは、下図のようなものでした。教員(大学)が学生に支援(教育サービス)を提供する、そして、それらの刺激を受けて、学生が成長していくという比較的、固定的な関係性のもと教育が展開していました。ですから、そこでの学生は、一方的に知識を与えられ、それを吸収するだけの人になりがちだったわけです。

しかし、今回のシンポジウムではそうではありません。学生は、一方的に与えられ吸収する人ではない。では、どうなのか？ 今回のビジョンとして提示するのは、次のような関係です。



学生も教員と同じく吸収し発信する人
(=研究者) である！

そのための援助 = 障害学生支援

今回の枠組み

教員と学生が互いに、キャッチボールのように発信し合い、その相互の発信を繰り返す中で、支援そのものを良くしていくという発想です。もしそのような展開が可能になったならば、それは障害学生支援の範囲だけでなく、大学教育の有り様自体を変えていける可能性があるだろう、という展望をもっているわけです。

ここでの「学生」は、吸収をするだけの人ではありません。吸収し、発信をする人です。この学生が発信することを、積極的に支援しようというのが、シンポジウムのタイトルにある、学生も「研究者である」という部分に込めた意味です。

ビジョンに続いて、このシンポジウムの狙いですが、まず、このビジョンを会場に来ていただいた皆様と共有するということを1つ目の狙いとしております。2つ目の狙いとしては、それぞれの発表のところで、その実現の強い味方となってくれる価値・障害観や、支援の仕組み、方法論を議論していこうというものでございます。

そこで、そのビジョンの達成に向けて、シンポジウムでは大きな柱を2つ立てました。それぞれの発表では、まず、これまではどうだったのか、どうしてきたのかという問い直しをします。その作業から、それでは、今からはどうしていけばよいかということを発信する、この2つが大きな柱となっております。

シンポジウムの流れはお手元のプログラムにそって進行いたします。よろしいでしょうか。では、私からのシンポジウムの導入となるお話は終わりとさせていただきます。

それでは、シンポジウムの最初のスピーカーは、倉本先生です。御存じの方が多くと思いますが、倉本先生は日本における障害学を引っ張ってこられたリーダーのお一人で、ご著書も多数執筆されています。今日は、その障害学の視点から、これまで「障害」というものをどのように捉えてきたのか、また、それを踏まえて、先ほどのビジョンを推進するような、もう1つの選択肢となる障害観には、どういうものがあるだろうかという視点から、お話をいただきます。では、倉本先生よろしく願いいたします。

(よしおか まさこ)